
Jack In The Box ?

結希千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jack In The Box ?

【Nコード】

N5419S

【作者名】

結希千尋

【あらすじ】

ジャンルごちゃ混ぜの1000文字小説です。

コーヒーメーカー（前書き）

『コーヒーちゃん』というイラストを元に描いたお題小説です。

コーヒーメーカー

給湯室の茶色いカラーボックスの上。そこに佇んでいるコーヒーメーカーは細身のお洒落なマネキンに似ていた。

「俺さあ、昨日すげー良い事あったさ」

向かいのデスク、白いノートパソコン越しに佐竹が思い出し笑いをする。

「残業でさ、眠いし疲れたから一服しようと思ってコーヒー入れたんだよ」

「へえ」

「あのなんとも言えない褐色の色とか香ばしい香りとかさ、ホント癒されるよな。知的癒し系美人みたいな、さ」

「で？何が良い事だったんだ？」

僕はどうでも良さそうに話を合わせた。佐竹の空想癖は今に始まった事ではない。同期入社で長い付き合いだ、慣れている。

「そしたらさ、その美人が『砂糖は幾つ？』って聞いてくれてさ」

「……はあ」

それは明らかに幻想だろう。第一男ばかりのこの事務所には癒し系美人の事務員は存在しない。

「しかもミルクまで入れてくれてさあ」

「眠気覚ましのコーヒーにミルクか」

「だってお前、美人に言われちゃ断れないだろ」

ここまで来たら空想ではなく妄想と言うべきか。呆れた笑いを浮かべる僕など佐竹の視界には映っていないようで、彼は彼女について事細かに説明しようとする。

細身で美形、ストレートの黒髪は右下がり長く。原色を使ったちよつと派手目の服が可愛くもあり色っぽくもあり。

「実は彼女さ」

「分かった分かった。相当眠いんだろ、コーヒー入れて来てやる」
僕は佐竹の目を覚まさせてやるべく、給湯室に向かう。あの妄想をストップさせるにはいつもの二倍は濃くすべきか。

コポコポと湯が沸く音がし、給湯室中が良い香りに包まれる。派手な三原色を纏ったコーヒーマーカーからカップに注がれる透き通った黒。立ち上る白い湯気に、なぜかほつとする。

癒し系美人、か。なるほどね。

さて僕も癒されるとするか、とカップを二つ手に持って給湯室を出かけた時。

『お砂糖は幾つ?』

驚いて振り返る。

ニコリ、微笑む“彼女”がそこにいた。レースの黒い手袋をはめた左手が、右手のトレーに乗せたシュガーポットを指差す。

「ひ、ひとつ」

『ミルクは入れます?』

「いえ、あ、はい」

無駄に焦っている僕を見て彼女はふふ、と楽しそうに笑い、ウインクして言った。

『お疲れ様です』

「な?癒し系だろ?」

いつもと違うミルク入りのコーヒーを受け取り、佐竹はニヤリと笑った。

雨上がりの散歩（前書き）

お題：水、あぜ道、手袋

音を表現する文章が入り、擬音を使うかあるいは全く使わない

上記のお題に参加した小説です。擬音を使わない方を選びました。

雨上がりの散歩

氷を浮かべたグラスの肌を大粒の滴が滑り落ちる。

暑い季節を迎えるというのに、彼女は何故か手袋を編んでいた。

猛烈な勢いでトタン屋根を叩いていた夕立が去り、空に明るさが戻る。傾きかけた日差しが雨雲の後ろ姿に虹を描いた。

「行きましようか」

「ああ」

彼女に支えられて立ち上がる。いつもより少し遅い時間の散歩。雨が止むのを待っていたかのように鳴き始めた虫達の熱唱を聞きながら、僕達は歩を進めた。鏡のように空を映す水に規則正しく植わった緑色が眩しい。

「今日は遠回りしましょう」

彼女に腕を引かれ、子供の頃よく通ったあぜ道へ向かう。二人並んで歩くのがやっとな細い道。

「昔よくこの道で駆けっこしましたね」

「そうだね」

一度足を踏み外して水田に落ちたっけ。泥に足を取られてもがく僕を心配した彼女が、先の夕立のような声で泣いて助けを呼んでくれた。

「あの頃から泣き虫だったね君は」

「ええ」

蛙だろうか。どこかで水音がはねた。アメンボが水面をリズムよく滑っていく。

「あの案山子、覚えていらっしゃる？」

彼女は少し先に立っている案山子を指差した。時の流れを思わせるくすんだ色の服。煤けた色の帽子に止まっていた鳥の羽音が僕ら

の頭上を過ぎて行く。

「まだあつたんだ」

「ええ。懐かしいでしょう?」

「ああ」

幼い頃は二人で毎年服を替えに来た。中学に上がってから案山子の手袋をポスト代わりにして他愛無い内容の手紙を交わした。そして。

「あの日あなたが下さった手紙は一生の宝物です」

彼女に想いを伝えたのもこの手袋越しだった。

「懐かしいな」

自分と丈が変わらなくなった案山子を眺める。が、ふと視界に違和感を感じた。

案山子の右手だけが真新しい水色の手袋をはめている。そう、昔手紙を交わした方の手が。

「この手袋、案山子のために編んでいたのかい?」

「ええ。今日は記念日ですもの」

脈絡のない彼女の返事。不思議に思った僕はもう一度案山子を見直した。

いびつに膨らんだ手袋。その光景と昔の記憶が重なった瞬間、僕の鼓動が空にまで響いてしまいそうな程加速した。

濡れている手袋から零れ落ちたのは雨の滴と色褪せない想い、そして愛の言葉。

「こんな伝え方も良いかしら、と思って」

悪戯っぽく僕を見上げ、彼女は小鳥がさえずるように小さく笑った。

嘘に变えないための嘘（前書き）

1000文字です。

嘘に変えないための嘘

『絶対遅れない』

その約束を半ば破りかけてる午後6時55分。俺は机上の書類と彼女の笑顔の間で板挟みになっていた。

カナと付き合って四年目の記念日。最近俺の仕事が忙しくなり最後に会った日は月めくりカレンダーを一枚遡る。

『記念日には会えそう?』

遠慮がちな彼女に力強い約束をしたのが一週間前。

『じゃあとびきりお洒落していくね』

必ず守ると心に誓った約束が嘘に変わるまであと30分。まあるい壁掛け時計が所長の笑顔に見えてくる。

『君には期待してるよ』

大事な日に残業を命じたにつくき所長も、もちもち頼っぺにぺこり浮かんだ笑窪故か憎みきれない。とはいえ仕事は終わらない。

仕方ない、カナに電話しよう。再び約束を反古にする事を小声で謝りつつ携帯を取り出した時。勢いよく肩を叩かれた。

「なーに油売ってんだよ」

「タカアキ」

小学以来の腐れ縁、良く言えば悪友のタカアキがニヤニヤしながら俺を見下ろしていた。

「カナちゃんとラブラブしてるはずの奴がどうして机とラブラブしてるのかな」

「机じゃない、書類だ」

くだらない冗談で時間を浪費してる場合じゃない。カナに連絡すべく携帯を開いた俺の手を、タカアキはパシンと叩いた。痛いだろ。「嘘つきは泥棒の始まりだぞマサト」

「何がだよ」

「絶対遅れないって約束したんだろ？早く行けよ、俺が代わってやるから」

何故それを知っている。思わず眉が寄った俺にタカアキは舌打ちした。

「親友の彼女に横恋慕なんてクサイドラマは無えよ。俺の好みは妖艶な美女だ」

「そうだったな」

「昨日電車で会ってさ。彼女言ってたぞ、今度こそ嘘にならなきゃいいなって」

マサトが悪い訳じゃないのよ、なんて出来た彼女だよなあ。

そう言ってタカアキは俺をどついた。

「ほら早く行け。約束が嘘に変わる前に」

ありがたき悪友の言葉に甘え、俺は立ち上がった。

「恩に着る、タカアキ」

「愛してると言え」

リクエストに英語で応え、俺は10秒で身支度を済ませた。残り20分、タクシーで飛ばせばぎりぎり間に合うだろう。

約束を嘘に変えない為、友人への感謝を胸に俺は事務所を飛び出した。

「俺ってイイ男だよなあ」

自画自賛し、タカアキは仕事に取り掛かる。

夕闇を背負った事務所の窓ガラスだけが、彼が一番の嘘つきだったという事に気付いていた。

嘘に変えないための嘘（後書き）

個人的にタカアキがお気に入りです（^^

それは例えるなら話すような、

真白の上に描かれた喜怒哀楽。

彼にとって、描く事は話す事だった。

彼は気味が悪いほど表情の無い子だった。

言葉を発する事は稀。質問には黙って見つめてくるか首を動かすかで答える。

食べたいものも欲しいものも無く、子どもらしく玩具をねだる事も一切無かった。何にも関心が無く、日一日、暗くなるまで二階の窓から外の緑を眺めていた。ただ、ぼおっと。

彼の境遇を考えれば、無表情も無関心も仕方の無い事とは思う。両親はおらず、病弱なうえに子どもらしさも記憶も無理矢理奪われてしまったのだから。

無理もない。そう思いつつも時々、この細い体はもしや機械仕掛けなのではと疑いたくなる位、感情を表にしない子だった。

そんな彼が唯一関心を示したのは、白い紙と色鉛筆。

最初に描いたのは空だった。一面ただの空色で埋めただけの青空。褒めるにも何を描いたのと尋ねるにも微妙な絵。それを珍しく自分から見せてきた。微かに得意げな栗色の瞳が私をじっと見つめ、返事を待っていた。その日、彼は久しぶりに体調が良かった。

発作を起こした次の日、無表情な彼はベッドの上で再び空を描いていた。ちらと覗くと、描かれていたのは重たい曇り空だった。彼はそれを私に見せたがらなかった。

青空、曇り空、夕焼け、星空。

その日の天気とは違う、彼が描く空を見ているうちにふと気が付いた。

描かれているのは空ではなく、その時の彼の感情なのだ、と。

『今日は体が楽なんだね』

青空の下に杏の花を模している彼に尋ねると、やはり無表情で頷いた。

『寂しいのかい』

描きかけた青空を灰色に塗り潰している彼に問うと、ただ黙って目を逸らした。

彼は感情を絵で表した。赤子が泣く事で、大人が言葉で気持ちを伝えるのと同じように。

喜びも怒りも涙も笑顔も、全てスケッチブックの上に表現した。色は、彼にとって言葉と同じものだった。

そして、現在。

「お前って本当に色フェチだよな」

目にした色を正確に記憶し、スケッチブックの上で“言葉”を自在に操る彼は、少しばかり名の知られた画家になっている。

「色は人と似ているから、」

だから、好きです。

言葉少なに答え、彼はふわりと微笑む。

腕に抱えた白の上には、清んだ青空を悠々と翔ける一羽の鳥が描かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5419s/>

Jack In The Box ?

2011年10月10日03時14分発行